

## 特別講演会 シリア・パルミラ遺跡の過去と現在

2025年3月16日(日) 榎原考古学研究所 講堂  
バルトシュ・マルコウスキ ワルシャワ文化財保存修復研究所所長  
「破壊されたシリア・パルミラ博物館の彫像の救済保存、2016-2024年」  
西藤清秀 榎考研技術アドバイザー 「パルミラの葬送観念」

【感想文 3月例会だより】

「ポーランド人の研究者が来日して、パルミラ遺跡の話をしてくれるらしい」、三月例会が特別講演会「シリア・パルミラ遺跡の過去と現在」になると聞いて、ユーラシアの東西交流史を調べていた私の心はずんでいた。

講演会の当日、会場で受付の役目を仰せつかり、立っていたところ、来日した講師のマルコウスキ先生が挨拶に来られた。突然の英語の会話にしどろもどろになったが、先生は友史会の一會員の私を研究所の人間だと勘違いしておられるのか、海外から来られたので「日本側の会場の人」に挨拶したいと思われたのか、感謝の言葉を口にされた。

講座の同時通訳は、研究所の平井洸史先生が担当され、当意即妙の素晴らしい日本語で講座は進行した。マルコウスキ先生の故国ポーランドは大国の間であって、戦争で文化財が失われた過去があり、内戦により破壊されたシリアのパルミラ遺跡の文化財を救出するため、ワルシャワ大学の地中海考古学研究所から派遣されて、遺跡の修復に尽力された。

パルミラ遺跡の博物館は武装勢力が籠城する要塞に変貌し、石灰岩製の出土遺物は即席の遮蔽物としてバリケードに変化していた。地下の収蔵庫の収蔵物も投げ出されて破壊され、籠城する勢力の事務室に姿を変えていた。マルコウスキ先生は持てる技術のすべてを投入したこの体験を、日本の考古学を愛する皆さんに伝えたいと、絞り出すように詳細を話されていた。

素人の私には初めて聞く話ばかりで、修復方法の新視点を万全に理解することは覚束なかったが、武装勢力の戦闘員も、徹底的に破壊して「安心」したはずの文化財が、実際には修復は簡単なものでは無かったとはいえ、粉碎された一粒単位で回収され、限りなく元に近い姿で修復されるとは想像もしてなかったのではないかと、という感想が残った。

マルコウスキ先生に続いて、西藤清英先生がパルミラの葬送観念について話された。死者に水を供献する副葬品の壺が、狭い塔墓から出入りが可能な地下墓に移行するにつれ、参列者が水を捧げる対象の水鉢に代わり、墓室内に井戸まで設けられたとの話を聞いて、大分県の5世紀末の幣旗邸（しではたてい）古墳で埋葬から数年後に天上の蓋石を数枚開けて、被葬者の足が動かされ、水を入れたと見られるヒョウタンが捧げられていた事例が目についた。

パルミラの墓の中には「永遠の墓」と記された部屋もあったとされるが、未盗掘で出土した若い成人女性の場合、「再生」の有無や出産の能力に関係するのか、お腹の上に二つの大きな石が乗せてあったとの話が、とても気になった。それらも、遺跡が破壊されたことで「可能性が失われた」後続の研究があったかもしれないと思うと、痛感するものを感じる一日になった。

名張市 米澤範彦